

教育課題連絡会議

重点(12)へき地・複式教育の充実

お手元に御準備ください。

- ◆スライド資料
- ◆R7「下北の教育」(案)

1

★令和6年度の力点(特に力点を置いて取り組んでいただきたい実践事項)

3 複式学級における「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業づくり

★児童生徒が自己調整しながら学習できるよう、ICT等を効果的に活用し、児童生徒が自分の学習の状況を把握・分析したり、自分に合った方法を選んだりする場を設定する。



○問題提示の工夫や思考ツールの使用、学習状況の記録の蓄積などにおいて、ICTの活用が見られた。
・児童生徒が自分に合った方法を選択する場の設定、ねらい達成のための効果的な活用については、今後の課題である。

指導の工夫をより効果的に行えるように、各教科等、単元の目標を達成するための年間を通した計画的な指導が必要

2

令和7年度の実践事項の柱

【令和6年度】

- 1 へき地の三特性(へき地性、小規模性、複式形態)を生かし、地域に根ざした特色ある教育活動の推進
- 2 複式学級における実情に即した年間指導計画の作成
- 3 複式学級における「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業づくり

【令和7年度】

- 1 へき地の三特性(へき地性、小規模性、複式形態)を積極的に生かす教育活動の推進
- 2 複式学級における実情に即した年間指導計画の作成
- 3 へき地学校・複式学級における「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業づくり

3

令和7年度の実践事項 変更点について 柱1

1 へき地の三特性(へき地性、小規模性、複式形態)を積極的に生かす教育活動の推進

へき地性

・地域の人的資源、物的資源や自然環境を生かし、地域と連携して教育活動を推進する。

小規模性

・小規模な教職員組織を生かし、教職員個々の役割を明確にして、全教職員が一体となった指導体制を構築する。
・小規模校において、児童生徒が互いのよさや努力を認め合い励まし合う機会や、全員が活躍する場を意図的に設定し、望ましい人間関係の構築に努める。

複式形態

・複式学級の特性を生かした学習指導を行うため、「へき地・複式教育ハンドブック」や先進校の研究成果などの資料を活用したり、校外での研修の充実を図る。
・多様な価値観にふれるために、遠隔教育や様々な学習形態を取り入れるなどの工夫をする。

4

2 複式学級における実情に即した年間指導計画の作成

★教科の特性（系統性や順次性など）や児童生徒の実態（学年差や個人差など）を考慮した上で、複式指導の類型を踏まえた年間指導計画を作成する。

- ・ 学年別指導において、指導の効果を高められるよう、2つの学年の学習内容の関連を考慮し、単元の配列を工夫したり単元全体をずらしたりするなどして年間指導計画を作成する。
- ・ 同単元指導において、同程度又は異程度の目標や内容を設定し、児童生徒の実態に応じた指導を行い、適切に評価する。
- ・ 合同学習において、それぞれの学年の目標を設定し、適切に評価する。

複式指導の類型の特徴（長所、短所）について理解を深める

追記

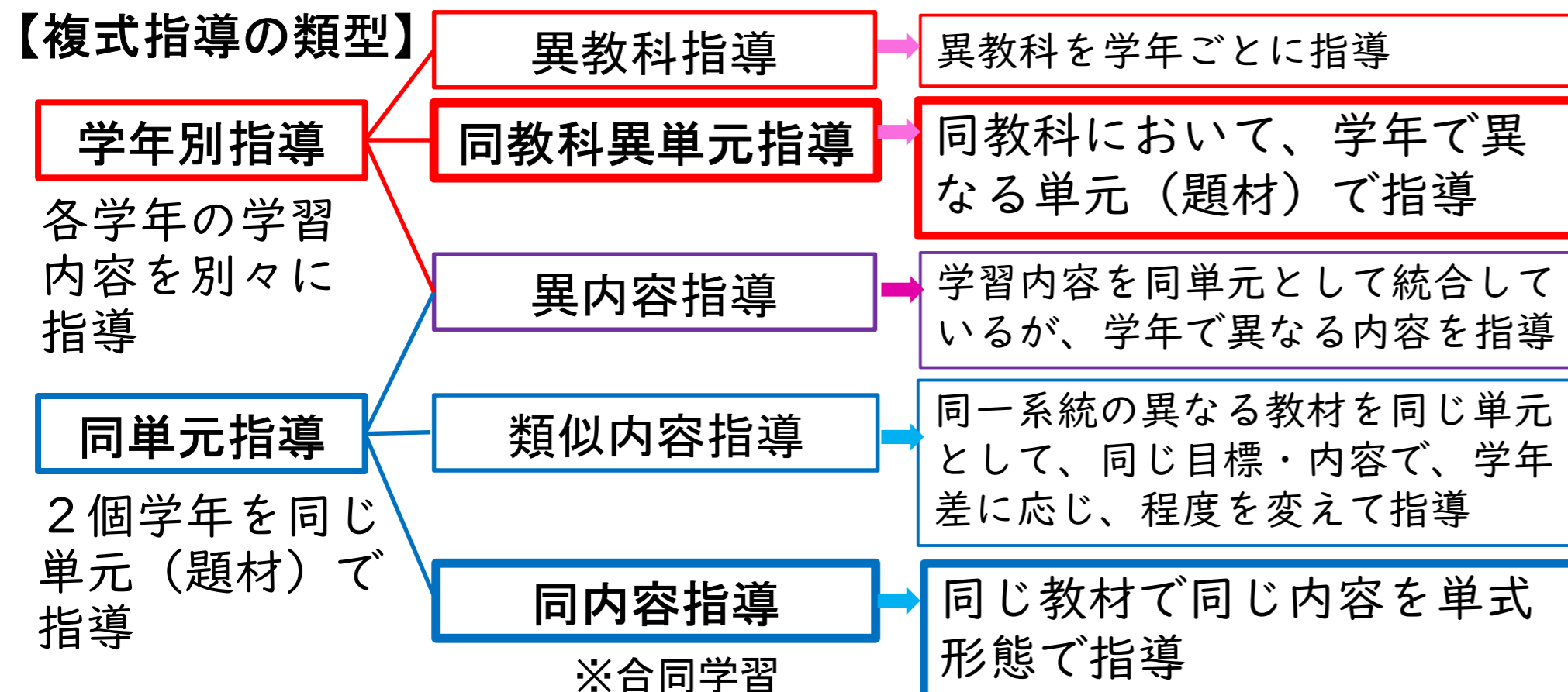
3 へき地学校・複式学級における「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業づくり

- ・ 児童生徒が自己調整しながら学習できるよう、ICT等を効果的に活用し、児童生徒が自分の学習の状況を把握・分析したり、自分に合った方法を選んだりする場を設定する。
- ・ 学年別指導において、直接指導、間接指導及び同時間接指導の特長を理解し、学習活動が効果的に行われるように「わたり」と「ずらし」を工夫する。
- ・ 間接指導において、児童生徒が自分たちの力で学習を進めたり、考えを深め合ったりすることができるよう、ガイド学習の充実を図る。

★令和7年度の力点（特に力点を置いて取り組んでいただきたい実践事項）

2 複式学級における実情に即した年間指導計画の作成

★教科の特性（系統性や順次性など）や児童生徒の実態（学年差や個人差など）を考慮した上で、複式指導の類型を踏まえた年間指導計画を作成する。



複式指導の類型の特徴及び年間指導計画作成時の留意点①

同教科異単元指導

長所	短所
<ul style="list-style-type: none"> ○発達段階に応じた指導が可能 ○児童生徒の転出入や欠学年の影響を受けない ○教科の系統性や順次性に応じた指導ができる 	<ul style="list-style-type: none"> △直接指導する時間に制限があり、<u>児童生徒一人一人への対応が十分に取りにくい</u> △教材研究や教具の準備など、<u>教師の負担</u>が増える

◆単元全体の「ずらし」

単元全体をずらすことにより、両学年の単元の導入場面が重ならず、児童生徒、教師いずれもゆとりをもって学習を進められる。

A 学年	B 学年
単元の導入	前単元のまとめ
単元の展開	単元の導入
単元のまとめ	単元の展開
次単元の導入	単元のまとめ

同教科異単元指導の学習過程における主な配慮事項

過程	指導	主な配慮事項
課題把握	直接	<ul style="list-style-type: none"> ○問題提示の工夫（児童生徒の解決したいという問題意識を大切に） ○解決の見通し（既習事項との比較） ○学習の手順の確認（間接指導に入れるかの見極め）
自力解決	間接	<ul style="list-style-type: none"> ○児童生徒のつまづきを予想した手立て（ヒントカード、ICT活用等） ○児童生徒の考えの把握（ノートやワークシート等への記録） ○全員が解決できる課題か、能力に応じて解決方法が考えられる課題かの区別
定着	直接	<ul style="list-style-type: none"> ○間接指導時の状況の把握（どこまで進んだか、どこでつまづいたか） ○児童生徒の思考傾向の把握と、それに応じた発問や揺さぶり ○児童生徒一人一人が考えを説明したり話し合ったりする力の育成
習熟・活用	間接	<ul style="list-style-type: none"> ○学習が低調にならないよう、学習内容の吟味 ○学習内容の単純化（難易度については、児童の実態による） ○定着の程度に応じた問題とし、正否の判断を時間内に行う工夫 ○児童生徒自身が学習を振り返る場面の設定

出典：H31.3 へき地・複式教育ハンドブック（一般編）p42（青森県教育委員会）

9

複式指導の類型の特徴及び年間指導計画作成時の留意点②

同単元同内容指導

長所	短所
<ul style="list-style-type: none"> ○教材研究等の時間を短縮できる ○教師に時間的余裕が生まれ、適切な個別指導が可能となる。 ○両学年が同じ学習活動を行うことで、多様な発想や協力的な学習が可能 	<ul style="list-style-type: none"> △低学年、特に<u>入学当初</u>は学校生活に慣れておらず学習が困難 △欠学年、転出入児童生徒がある場合、<u>未習部分の対応</u>に問題が生じる △<u>年間指導計画作成時</u>、<u>内容の系統性や順次性等を十分考慮</u>する必要がある

- ◆「二本案」の年間指導計画では、上・下両学年分の内容を2年間にわたり配列する。各年度の内容の分量や難易度の均衡を図り、バランスよく配列することが大切である。
- ◆いずれの年度においても、学習が系統的、発展的に展開するように、単元の配列を工夫する。

出典：H31.3 へき地・複式教育ハンドブック（一般編）p47（青森県教育委員会）

10

令和7年度の実践事項の柱及びカ点

- 1 へき地の三特性（へき地性、小規模性、複式形態）を積極的に生かす教育活動の推進
- 2 複式学級における実情に即した年間指導計画の作成
 - ★教科の特性（系統性や順次性など）や児童生徒の実態（学年差や個人差など）を考慮した上で、複式指導の類型を踏まえた年間指導計画を作成する。
- 3 へき地学校・複式学級における「主体的・対話的で深い学び」の視点による授業づくり



一般編

【参考資料】

「へき地・複式教育ハンドブック」
青森県教育委員会



事例編

11